

『母の夢』 他三篇

—— 幼き者を亡くした悲しみの歌 ——

母の夢

ウィリアム・バーンズ

ゆうべ ねいるこ

夢をみました

あゝ あのいさしい有様!

さめても やはり泣けるのです

やるせなや わたしをあこに

行つてしまつた可愛い坊や

ほんまに わたしのあの坊や

召されて行つた坊やの夢

み空の國を

探してゐますこ

曾 根 保 譯

可愛いやさしい子供等が

みんな白百合のよそほひで

手に手にこもしびを持ち

列をつくつて参りました

目にはつきりこ見えながら

一人も物は申しません

やがて何やらさみしげに

うちの坊やも來ましたが

手に持つこもしび

あゝ 火が消えてゐるのです

不思議と思ふわたしに

半ばふり向き

「母ちゃんの涙で消えちやつたの
ね もう泣かないで頂戴な」

* * *

幼き者を亡くして

ロバート・ブリッヂェズ

可愛い完い身體、瑕も汚れもなく、
充ちみちた麗しい力も男らしさを思はせてゐるが——
冷たく、硬く、裸になつてゐても

生命の華ミ魅力はなほ暫しごまつてゐる。

母の寶であつたお前——あゝ今ははや
奇しき歡喜に母の心を訪ふ由もなく、
父の衿持もあだこなつた——あゝ父も

信仰を固め、悲しみにゆるがぬ力を養はねばならない。

最後のつぎめとして、今お前の身體を動かすミ
ふいご振り向き、手なき動かし、私に應へる。

何かのはづみで動くお前の頭、可愛らしさが
ほの見えて、愚かしい私の心をかき亂す。

お前の手は、日頃の如く、わたしの指を握つてゐるが、
それはすでにいたましい、硬ばつた「死」の手だ、
それなのに、わたしの手をさぐり求める、

お前の意志、お前の歡び、信賴からでもあるやうに。

それで、お前をそこへ寝かさう、落窪む臉をござし——
さあ、柩の裡に、お前の最後の小さい寢床におやすみ！
賢しくも、また哀しい頭を支へつゝ、
蒼ざめた硬いお手々を胸に置いて。

あゝ靜かにねむる子よ。生から死へ、それをお前は満足
してゐるのか——

「死」は何處へお前を連れて行つたのか、
この世の災ひを正しくする國へだらうか、
骸を慕ひて泣き、ひたすらにお前を暖め
目覺さうご希ふわたしには見えぬ國へ。

あゝ、光明の限りを想つても、この悲哀をすて、
心はげますごこは出来ない——暗闇の中に、

心ならず、残されて悄然と船出する今、
今日が日まで見、知り、聞き及んだすべてのものゝ虚し
い今は。

* * *

死んだ兒に

リチャド・ミドルトン

人間が企てれば、神は宜しき時に定め給ふ、

それでわたしはお前の休んでゐるところへ行つた――

可愛い薔薇はらのうちの一つの薔薇、

薔薇に劣らず咲き匂ふお前のところへ。

幼いお前は歩き疲れたのでもあらうか、

花の床から起き出て迎へてはくれなかつた。

でも、死んだふりをして

わたしに冗談をしてゐるのだと思つてゐた。

* * *

ほんまうに眠むつてゐるのだと思へる位

嘘を靜かに、大空に、そして

髪の毛も動なかつた。でも、確にうす眼でみてゐたのだ、
だからわたしは聲を立てずにゐた。

神だけが知つていらつしやる、そして宜しい時に定め給
ふ、

それで、わたしは微笑みながら、靜かにお前の名を呼び、
薔薇に埋まつたお前にわたしの薔薇も、一つ投げて歸つ
て來た、

戯れの眠りと思つたから、そのまゝに。

* * *

東京の「第一印象」

エドマンド・フランケン

廣い海を渡り、もの憂い世界を半周して

この見なれぬ家に著いたかと思ふに

あの可愛い子の靈が、死んだわたしの子供の

いさしい、世にもさみしい靈が思ひ設けずやつて來た。

他郷のこの家の、がらんとした壁の四隅から

あの子が美しい眼をしてのぞいた。

又してもやるせなく、こめきなく涙が涌いて来た。

あゝ、亡くなつた子が夢の姿をしてあがいてゐる、歌つてゐる。

狂はんばかりのわたしのこの心——

あたりは、しんみしてゐるのに聲が聞える。

おゝ、お前は、死神がさらへて放さないのだらう、

小さな聲が漂つて来る、わたしの行けないところから。

あの微笑が目に見える、遙か故國の牧場の

かげらうの花のやうに。

やさしい花がお前のよちよちみ歩く路に

黄金色こぶねに咲いてくれ、咲いてくれ。

で、わたしは冥想に耽つてゐた。するに隣の家の

引戸が開いたかと思ふに、小さい子供等がきやつきやつ

き外に飛び出した様子だつた、

そしてすばらしい遊びをしませうと幼い子等のびちびち

した聲が聞えて来た。

わたしはのぞいて見た。みるに綺麗な着物を着た子供が

土を盛つて庭園をしつらへてゐる。仕切つて花の床をつ

くり、

大きい木の葉を立てゝ大木だ、早く芽を出せ出せなき言つて。

おゝこゝにも何百萬いふいふ——わたしは聲に出して言つた——

速かに健かに花さくたのしい子供等がゐるのだ。

限りなき青春の調べで以て、家の人、家無き人の心を充

たしてゐる。また別の世界にも何百萬いふゐるのだ——恵

深い自然よ！

これらの可愛い花の一つが、よし地に落ちてても子供の世界

は到る處を支配し、

全地球はそれを見、聞き、心に誇るこゝが出来るのだ。

隣の子供等はあちらこちらに駈けり、はしやぎ、

わたしも、つひ光にさよはれ、自分の子のやうな氣になつて

自然の母性にうれしくも信まことを感じた。

わたしには尙二人の子供が與へられ、残されてゐるではないか

か今もサフォクの小徑を行く二人の姿が見える。

愛と安心の氣持が胸一杯に流れた。

しかし、なほ子供の靈がみえて来た、確に、一人の子を失くしたのだ。